４．果　樹

（１）道南における果樹栽培の変遷

果樹生産者で構成される「北海道果樹協会」では、北海道における本格的な果樹栽培は、明治６年(1872)、北海道開拓使本庁(札幌市)構内にりんご、なし、ぶどう等を植え付けたのが始まりとしているが、道南地域はそれ以前に洋種果樹が導入されており、北海道における洋種果樹の発祥地である。定着しなかったとはいえ、明治元年(1868)にドイツ人「ガルトネル」が現在の七飯町に土地を租借して農場を開き、明治２年(1869)に母国から導入した果樹類を植え付けている。また、北海道開拓使はその土地を官園として発足させ、果樹の苗木供給とともに栽培技術の拠点としての役割を果たした。明治27年(1894)に七重官園が廃止されてからは、地元の七飯町や近隣で栽培が進められた。以降、昭和20年頃までは、栽培技術が確立されていないことなどから一進一退の状態で推移した。

北海道の果樹栽培は、昭和40年代にりんごが約4,000ha、果樹全体では約7,000haでこの時代が栽培面積のピークであった。その後は、凍害や腐らん病を主体にした病害、都市化、嗜好の変化などで現在は約半分と大きく減少した。

道南地域の果樹栽培も同様で、栽培面積は減少しているが近年はプルーンやブルーベリーなどの樹種が増加するなど多品目化が進んでいる。以下、各地域の特徴的な動向と現況について述べる。

七飯町は開拓使時代に官園が設置されたことからその歴史は古く、道南地域の最大の果樹産地である。昭和40年代後半には果樹全体で231haのうちりんごが140ha、梨33haであったが、現在は鳴川地区や大中山地区を中心に約100haで、りんごが最も多く70haと最高時に比べほぼ半減している。近年は、おうとうやぶどう、プルーン、ブルーベリーなどが組み合わせ果樹として増えている。栽培面では、りんごはわい化栽培が大半を占め、おうとうの雨よけ栽培やぶどうの無加温ハウス栽培なども良質果実の安定生産技術として導入されてきた。現在、道内の果樹生産者で構成している北海道果樹協会に参加しているのは、道南エリアでは七飯町果樹組合だけである。

旧大野町(現北斗市)は、北海道では最も古くから果樹が栽培されていた。記録では日本在来種のなしが「文月なし」として享保年間から栽培されていたとされる。洋種果樹は、七重官園から明治８年(1984)になし・りんご・もも・すももが各戸に数本ずつ無償配布されたのが始まりである。官園が近いこともあり果樹栽培が増加し、明治末期から大正中期にかけては果樹園10町歩、苗圃10町歩という大規模経営もみられたが定着せずにその後は漸減した。現在は、向野地区や文月地区で数戸がりんご、おうとう、プルーンや栗などを主体にした観光果樹園を開設している。なお、経済栽培ではないが、昭和50年代に商工会が中心となって「マルメロ」が導入され特産物になっている。

森町は、古くはぶどうの一大産地であったが気候の変化等で良質なぶどうが生産されなくなったことから野菜（かぼちゃなど）に転換された。昭和50年代に入り、機能性成分や新規果樹への関心の高まりを受け、道内に先駆けてプルーンが導入された。栽培面積約15haは近年まで道内一位で、10a当たり100本植の超密植栽培が特徴である。品種は「サンプルーン」が大半を占めているが近年は大玉系の「パープルアイ」なども増加している。現在、森町と合併している砂原町（現森町砂原）は、昭和50年代から中央農試と連携しブルーベリーを導入したが、経済作物としての位置づけにはなっていない。

上ノ国町は、古くから数戸でりんごやおうとうが栽培されてきたが栽培面積は横這いからやや減少している。

乙部町は、昭和50年代に道南地域では初のワインぶどう栽培が富岡地区で始まり、自社ワイナリーで製造したワイン（「おとべワイン」「遊楽部ワイン」）が販売された。なお、北海道では栽培が困難とされていたフランス系「メロルー」種を秋が長い道南地域の気象を活かして導入したのも大きな特徴であった。現在は札幌酒精に引き継がれている。

奥尻町は、平成10年(1998)過ぎから地元建設業者がワインぶどうを栽植し始め、現在約20haで平成20年（2008)にはワイン工場が設立された。将来は25ha、150㌧のワイン生産を計画している。

熊石町（現 八雲町熊石）は、平成に入ってから道南農試で育成した栗品種「オータムポロン」「オータムコロン」を数千本導入した。

瀬棚町(現 せたな町瀬棚区)は、昭和60年代に余市町の業者と提携し、近隣の島牧村などと共におうとうが導入されたが定着しなかった。近年は一部でブルーベリーが導入されている。

（２）試験研究の経過と成果

当場における果樹は明治44年(1911)にりんご、なし、ぶどう、おうとう、桃が栽植されたのが始まりであり、果樹試験は大正５年(1916)から開始されている。また、大正10～昭和17年(1917～42)までは、果樹模範園として果樹栽培者向けの技術拠点の役割を果たした。

１）りんご

道南農試におけるりんごの試験は、大正６年(1917)からである。品種に関する試験では展示的な役割を含めた品種比較試験（大正６～昭和25年(1917～50))、栽培関係では、摘果時期試験(昭和３～７年(1928～32))、無袋栽培試験(昭和25～27年(1950～52))などが行われた。昭和32年(1957)以降は、向野地区に開設された果樹園において、りんご整枝剪定に関する試験(昭和36～46年(1961～1971))、昭和40年代に入るとデリシャス系品種が導入され､デリシャス優良系統選抜育成試験(昭和40～51年(1965～76))、栽植密度試験(昭和41～52年(1966～77))、ゴールデンデリシャス無袋化試験（昭和44～48年（1969～73））)、新品種比較試験(昭和52～平成3年(1977～91))などが実施された。昭和50年代に入るとスターキングに代表されるデリシャス系品種から「つがる」「ふじ」を主体にした品種特性調査が実施された。昭和56年(1981)からは中央農試育成系統(「ＨＡＣ系統」)の地域適応性検定試験を行ない、中央農試で育成した北海道初めてのりんご品種「ハックナイン」(昭和60年（1985))や「ノースクイーン」(昭和63年（1988))の普及に際し、道南地域におけるデータを提供した。また、外国からの導入品種「ニュージョナゴールド」(昭和63年(1988))の普及に際しても、中央農試とともに成績を提出した。

２）なし

なしの試験は大正５年(1916)から始められた。主な試験は、品種試験(大正５～昭和25年(1916～50))、摘果時期試験(昭和３～７年(1928～32))、剪定法に関する試験(昭和15～17年(1940～43))、長十郎梨の無袋化試験(昭和17～18年(1942～43))、整枝法試験（昭和37～43年(1962～68))などである。

整枝法試験では、有棚は無棚に比べて強風時の落果が半減すること、無棚整枝のＶ字２本主枝では成木になると強風時に主幹が裂開するので多段多主枝型が安全なことを明らかにした。

３）ぶどう

ぶどうの試験は、昭和２年(1927)からの品種試験が始まりで、数多くの品種が供試され、その中で経済性のある品種として「キャンベルアーリー」、「デラウエア」、「ナイアガラ」の３品種が有望とされた。耕種法に係る試験では、昭和３年(1928)摘心試験を始めとして多くの試験が実施された。その中で、摘心により結果歩合と収量は高まるが熟樹が遅れること、環状剥皮処理は熟期は促進されるが収量差はなく樹体が衰弱すること、摘粒・摘穂の時期は落花直後が良好なこと、着袋の種類は新聞紙が良好で黒色袋は光沢は良いが減収となるなどの結果を得た。また、ジベレリンの影響試験(昭和34～35年(1959～60))、植穴大小比較試験(昭和37～41年(1962～66))、苗木春植秋植比較試験（昭和37～38年(1962～63))なども検討され、苗木の移植時期は秋植の方が良好なこと、施肥法では全面施肥法が生育が良いことなどを明らかにした。

４）おうとう

おうとうは、昭和２年(1927)から試験が始められた。品種比較試験（昭和２～13年（1927～38))では「ビング」「ナポレオン」「北光（水門)」「大紫」「高砂」「黄玉」「セネカ」「日の出」など14品

種の特性が検討された。また、第２弾の品種比較試験（昭和52～平成３年(1977～91)）では、「チヌーク」「レーニア」「佐藤錦」「天香錦」「南陽」など18品種の特性が検討された。これらの導入品種の中から、北海道の特産品種となっている大粒で良食味の「南陽」を北海道優良品種として普及に移した(昭和63年(1988))。当時、おうとうは、北海道として振興樹種として位置づけられたこともあり、平成２年(1990)からはおうとうの品種育成に着手した。また、同３年(1991)からは、国の系統適応性検定試験を担当することになった。新品種育成では「南陽」並の大きさと食味を目標に育種が進められた。その後、試験は中央農試に引き継がれたが、選抜された系統は「ＨＣ１」(「南陽」が母親)として道内主要産地での特性が検討され、平成18年(2006)に道優良品種「ジューンブライト」として普及に移された。昭和53年(1978)から、おうとうわい化に関する試験を開始した。台木では「真桜（アオバザクラ)」「マザート」「マハレブ」などを対照に、「千島桜」「富士さくら」などを供試し、台木の繁殖法（実生、挿し木、取り木)、接ぎ木親和性、わい化度などについて試験を行った。これらの中から「千島桜」に着眼し道内各地から千島桜とその近縁種が収集され、昭和63年(1988)に台木育成試験がスタートした。これらの試験から６つの有望系統を選抜して検討した。その中で、わい化度が適当で耐寒性が高く接ぎ木親和性の良い「ＤＳ１」を有望とした。なお、本系統は、中央農試から平成14年（2002）におうとう台木品種「チシマ台１号」として発表され、北海道優良品種となった。

５）もも

桃の試験は、昭和10年(1935)に品種試験が始まり、３期にわたって、生食用品種と缶詰用品種の31品種が検討された。なお、ももは樹齢が進むにつれて枯死などの障害が多く道南地域では定着しなかった。

６）すもも（李）

すももは、昭和10年(1935)から及び昭和36年(1961)の２回、品種比較試験が実施され「ソルダム」や「ビューティ」など、現在でも主要な位置にある品種の優秀性を明らかにした。

７）うめ

うめの試験は、道内外から収集した15品種・系統による豊後梅優良系統選抜試験(昭和40～49年(1965～74))が実施され、北海道において栽培可能な実梅が検討された。優良系統は花弁と雄しべの数が少なく花托の毛じが多く、不良系統はこの逆であることを明らかにした。また、昭和50年(1975)に、耐寒性や結実性などの栽培適正が高く梅漬けなどの加工適性の高い「大野豊後」を北海道優良品種として普及に移した。

８）栗

栗の試験は、昭和10年(1935)の品種比較試験が始まりで昭和55年(1980)まで４回に分けて実施された。栽培関係は、栗苗木育成技術に関する試験(昭和49～53年(1974～78))、接ぎ木の穂木の採取時期試験（昭和49～51年(1974～76))、接木時期試験(昭和50～51年(1975～76))などが行われた。

昭和59年(1984)には、導入品種の特性調査により他県で育成された品種の道南における適応性を明らかにした(昭和59年(1984)指導参考)。くり品種の育成は、昭和41年(1966)から実施され、道南地域の在来品種「銀太郎」の種子を5000粒播種した実生から食味などの果実特性や耐寒性に優れたものを選抜し、平成元年（1990）に「オータムポロン」(「道南一号」)、「オータムコロン」(「道南二号」)として北海道初めての栗品種として北海道優良品種として普及に移された。くりの苗木育成技術では、接ぎ穂は２月中旬から３月下旬にかけて採取・冷蔵し、接ぎ木は５月中旬から下旬にできるだけ高い位置に行うなどを明らかにした。

果樹部門は、平成４年(1992）３月末をもって廃止され、継続中の試験研究課題は中央農試園芸部に引き継がれた。

（技術普及部　山口作英）

オータムポロン（道南１号）
道南地域の在来品種「銀太郎」の種子から育成。
果実は 12 ～ 13g とやや大きく、食味が良い。
10 月上旬頃よりきゅう果（いが）から落下し始める。

オータムポロンの樹姿

オータムコロン（道南２号）
育成経過はオータムポロンと同じ。果実は８から９ g とやや小さいが、食味はすこぶる良好。
９月下旬頃よりきゅう果（いが）から落下し始める。